第4回九鬼周造記念シンポジウム
「書簡と遺稿が伝える九鬼周造の面影」
二〇二二年一二月一七日
甲南大学一八号館三階講演室開催

○司会　皆さん、こんにちは。ようこそ甲南大学へお越しくださいました。ただいまから「第4回九鬼周造記念シンポジウム〈書簡と遺稿が伝える九鬼周造の面影〉」を始めさせていただきます。私は本学文学部教員の西欣也と申します。

この「九鬼周造記念シンポジウム」は、近代日本を代表する哲学者である九鬼周造が甲南大学と特別な関わりを持っていることにちなんで、本学人間科学研究所で毎年開催されている企画です。「特別な関わり」というのは、九鬼周造の蔵書類、また自筆ノートや草稿などが九鬼周造文庫という形で甲南大学図書館に収蔵されているということです。ノート、原稿、それから新聞記事のスクラップなど、主な部分は既に甲南大学デジタルアーカイヴという形でインターネット上に公開されております。ただ、書簡などプライバシーに関わる恐れのあるもの、また新たに見つかった資料については未発表の状態です。今後の公開に向けて、現在整備が進められています。

さて今回は「資料の公開」という観点から九鬼周造の哲学にアプローチする趣旨で記念シンポジウムを企画させていただきました。一般に、新しい資料が発見され公開されていくことで著名人の新しい相貌が明らかになっていきますが、哲学者の場合、例えば小説家や政治家の草稿の場合とは異なった事情が生じるかと思われます。ではその哲学者の場合には新しい資料の発掘や公開がどのような意味を持ち得るのでしょうか。そういう問題意識の下で、本日はお二人の先生からお話をうかがい、また皆様とともに議論しながら考えていきたいと考えております。哲学者の遺稿を発見していくことの難しさであるとか、楽しさやおもしろさも見えてくるといいのかな、と考えています。

なお、本日のシンポジウムでは、会場に足を運んでくださった皆様に限って、未公開の資料を投影させていただきます。休憩時間には写真資料も自由に御覧いただける機会を設けたいと思っております。それらの資料についてはまだ翻刻作業も完了していない状態にありますので、撮影等は御遠慮いただきますよう御配慮をお願いいたします。

では早速シンポジストの方々を御紹介させていただきます。まず、中嶋優太先生です。中嶋先生は石川県西田幾多郎記念哲学館で研究員をされる中で、西田幾多郎の遺稿類の公開の

ために先駆的な取組をされました。今日はそのお立場から、哲学者の資料、遺稿の公開一般についてお話くださいます。

お隣にいらっしゃるのが小浜善信先生です。小浜先生は、岩波文庫版の九鬼周造『時間論』の編集・注解を御担当され、また御著書『九鬼周造　漂泊の魂』を二〇〇六年に著されているほか、九鬼周造について多くの論文等を発表しておられます。九鬼研究の第一人者と言える方です。本学が所蔵しております九鬼文庫の翻刻作業も、小浜先生が中心となって進めてくださっています。

まず中嶋先生からお話をいただき、続いて小浜先生から九鬼の書簡等の公開の意義についてお話いただく流れとなります。では中嶋優太先生からよろしくお願いいたします。

○中嶋　皆さん、こんにちは。今、御紹介いただきました中嶋といいます。よろしくお願いいたします。

私は、九鬼周造については小浜先生に教えていただいたことがあるのですが、ほとんど素人です。それで、こんなところでお話をしていいのかなと思っているのですが、今日は西田幾多郎の資料のプロジェクトのことをお話しすることで構わないということでしたので、来させていただきました。

九鬼周造の資料に関しては、ノートであるとか、そういったものは既に整理をされて公開までされていると聞いています。その点では、あまりお役に立てないかもしれませんが、しかし、まだまだ新しい、公開されてない資料もあるというお話でしたので、何かしらお役に立てればと思っております。

まず、私の自己紹介です。実はこの一〇月から石川県立看護大学に赴任をいたしました。それまではどこにいたかと言いますと、石川県西田幾多郎記念哲学館という、西田幾多郎という哲学者の博物館で働いておりました。今日お話しするのは、主にここでやっていたことです。

この博物館のことについて、少しだけお話をしておいたほうがいいと思います。この博物館は二〇〇二年に開館いたしまして、博物館の建物自体は石川県が建てております。ですから館名に「石川県」とついているのですが、運営は石川県ではなく、かほく市という人口三万五千人の小さな市が運営をしています。かほく市出身の哲学者西田幾多郎の顕彰をするということで、彼の遺品なんかを収集し、書簡であるとか、遺稿なんかももちろん収集をしている「人物博物館」です。それと同時に哲学の魅力を伝えるというミッションもあって、「哲学の博物館」という役割も持っております。

さらに、西田幾多郎記念哲学館の前身が「西田記念館」といいまして、一九六八年に開館をしております。非常に長い歴史がありまして、その頃から資料を収集しております。ただ、その道のりは平坦ではありませんで、特に西田記念館の頃には、御遺族の方からはあまりよく思われていないような

ところもあったと聞いております。これは当然のことだとは思いますが、親であるとか、近しい親族の関係の中ですと、自分の親がこういうふうにある種祭り上げられてくることに違和感があった。そういうことで、なかなかうまく御遺族の方と関われないところもあったようですが、これまでの学芸員さんの努力もありまして次第にご遺族の方とも親しくさせていただく形になってきた、そういう経緯があります。

このように、西田哲学館は長い歴史を持っているのですが、今日お話しする資料の翻刻とか公開についてのプロジェクト自体はごく最近に始まったものです。二〇一五年の一〇月に西田幾多郎の御遺族の方、西田幾久彦さんから西田哲学館に資料をお寄せいただいたんです。それ以前からやり取りがありまして、ちょうど引っ越しのタイミングだったかと思うんですけど、西田家で引っ越しをされるときに家を整理していたらこんなものが出てきたということで、荷物を送っていただいたところがスタートになります。

その送られてきたものが何だったかと言うと一二個の紙包みです。届いたときには、中身は分からなかったわけですが、後ほど確認できたところによると、ノートが五〇冊、ノートの形になっていない紙状の資料が二五〇部ある。それが届いた時点ではかなり湿気を帯びていました。保存されていた場所も、御遺族も把握されていなかったような場所だということで、湿気を帯びていて、カビていました。すごい甘い匂いがしていた記憶があります。資料をめくるのも難しい状況でした。比較的きれいな状態のものもありますけれども、バリバリに固まってしまっている、非常に困難な状態のものもありました。

この資料を一目見て、西田直筆のものであり、かつ未公開の資料であろうということで、その時点で、将来的には翻刻を行う必要が出てくるだろうなと思ったわけです。しかし、今振り返ると、哲学館の資料の修復、翻刻のプロジェクトを始める背中を押したのは、資料の状態の悪さだったと思います。というのは、このまま冬を迎えて、湿気の多い梅雨、そして夏となっていくと、恐らくカビなどのために、この資料の中の多くは損壊してしまって内部の情報が見えなくなってしまう、そういう切迫した状況だったのです。

それで資料を救うためにはすぐに修復をしなきゃいけない。しかし、それにはかなりの人手もコストもかかる。これはどういう組織でもそうだと思いますけど、そういう作業をするためには、この資料の重要性、資料活用の方向性を示す必要がありました。それで、中身が十分見られない状態でもあり、あるいは、見切り発車の部分もあったかもしれませんが、これらの資料は非常に重要なものであって、西田哲学研究、日本哲学の研究にとって極めて重要なのだと言い切って、初め

から出版を目指してプロジェクトをスタートした。そういう経緯があります。

写真を見ながら経緯を見ていきます。資料が届いたところです。最初に調書を取っているところ。これは紙包みの調書を取っている状況です。次に、一冊ごとに調書を取っています。開こうとしても、これ以上は開かない資料もあります。見てもらったら分かるように、水で流れている文字もある。特に赤い文字が流れているのが分かると思います。これは一番ひどかった資料の写真です。これは紙包みの状態ですが、板状になっています。これを分解しますと中に四冊ノートがありました。それから、ノートの形になっていない資料はこのように背中がとじてない。その中にも、このようにひどい状態のものもありました。

こうした資料をどういうふうに修復していったのか。まず湿っていますので乾燥させないといけない。奈良の文化財研究所にお願いをいたしまして「真空凍結乾燥法」というものをしていただきました。私、よく分かってないですが、資料を凍結させて、それを真空状態にする。それを真空状態のまま温度を上げると、氷が液体にならずに気体へと昇華して、乾燥させることができる。そういう原理だそうです。ところが、このような仕方で乾燥をさせると、今度は乾燥し過ぎて資料を開けないという状況が出てまいります。それでページを開くという展開の作業が必要になってきます。

いくつか作業中の写真をお見せします。展開作業、つまりページを開く作業をしています。こんな感じですね。中には、こんなひどい資料もあります。これを開くのは怖いですね。それから、こちらは機械で殺菌をしております。こちらもクリーニング作業です。

このような展開作業をしまして、ページが開けましたら、今度は写真を撮りました。写真がありますと翻刻をすることもできますし、一方でレプリカを作成して展示に使うこともできます。

また、翻刻が完成するまでに途中経過の段階でプレスリリースをいたしました。これが二〇一八年でしたけれども、地方紙では一面に取り上げられたほか、全国紙などさまざまなメディアに取り上げていただきました。プロジェクトが継続できるように、このようなアピールをしたということです。

ここで、資料の全体像を見ていただきたいと思います。まず、時代的なところです。西田幾多郎の生涯については、お配りしている哲学館のパンフレットを開いていただいたところに「略年譜」があるので、そちらを参考にしていただければいいかなと思います。西田の人生は大きく分けると、まず、石川県で育ちまして、東京に、帝国大学に行く。その後、ま

た金沢に戻ってきて、しばらく中学校の先生、高校の先生をしている。途中に一回山口にも行きますけど、主に石川県にいる。それから、一年間だけ学習院につとめまして、そこから京都に行く。こういう流れになります。

今回見つかった資料のうち一番古いのは、西田が帝大で学生だった頃のものになりまして、一番多いのは西田が金沢に戻ってきて、中学校、高校の先生をしていた金沢時代のものだろうと思います。さらにその後、西田が京都に行ってからのものもあると思われますけど、恐らくは京都に行ってすぐくらいの、かなり京都の初期のものだろうと思われます。そういうわけで、西田のキャリアの中で言えば比較的若い頃の資料が大半だろうと考えています。もちろん、時期区分はかなり分からない部分が多くあります。今見ていただいているのは以前におこなった企画展の図録に掲載した図ですが、ここでは、ノートの形状とか、ノートに書かれたマークを手がかりに分類しています。マークはメーカーや販売所のものだと思われますけれども同じ種類のノート、同じ販売所から出ているノートは大体同じ時期に使われていたのだろうという推測の下に分類をしているわけです。

今度は、時期ではなくてノートの内容について見ていきたいと思います。特に貴重だと思われるのは講義ノートとか思索ノートと呼ばれるような、西田が自分自身の思想を書きつけていると思われるようなノートです。それから貴重なというか、こんなものが残っていたのかと驚いたのが受講ノートです。西田が帝大時代に受講をしたときのノートです。それから、一番数が多かったのは読書ノートです。これは欧文をそのまま書いているものもあれば、ある程度まとめながら、日本語に訳しながら書いているものもあります。それから、当然分からないものも結構ありました。

ノートは哲学館のウェブサイトで公開しておりますので、是非見てみてください。こちらが哲学館のホームページですけど、そこにデジタルアーカイブのバナーがありまして、それを選択するとこのような画面になります。下を見ていくと、カテゴリーつまりノートの内容の種類からノートを検索でできます。例えば「講義ノート」を選びますと、アーカイブに移動いたしまして、講義ノートがこんなふうにずらっと出てくることになります。

講義ノートは三種類あります。まずは倫理学講義ノート。これは西田が京大に行ってすぐに行った倫理学の講義の講義ノートで、四冊あります。つぎに宗教学講義ノート。これも西田が京大に行って割合すぐに行った授業の講義のノートです。それと論理講義ノート。これは恐らく金沢で西田が思考で論理の授業をしたノートだろうと思われます。今見ていただいているのは倫理講義ノートですが、かなり文字が薄く

なってしまっていたり、汚れたりしているところがあるのが分かっていただけるかなと思います。

このノートの場合、基本的に日本語で書かれているのですが、重要な単語のほとんどは日本語ではなく英語かドイツ語で書かれている。これは西田のノートの特徴かなと思います。

次に思索ノートも少しお見せします。講義のノートではないですけど、恐らく西田が自分自身の思想を書いているものだろうというものです。見出しがありまして、その下に文章があって数ページにわたって書かれていて、また新しい見出しがあって、また数ページ議論している。そういうノートになっています。

ずっとお見せしていると時間がなくなってしまうのですが、あと一つ、受講ノートをお見せします。これは、西田が帝大時代に村上専精のインド哲学を受講したときのものです。こういうふうに表紙にタイトルを書いていますので、内容の特定が楽でした。中は縦書きで書いています。西田の場合、このような古い時期のノートは片仮名で書いていることが多いです。

この中で、一番興味深いのは講義ノートかなと思います。皆さん、講義ノートというと、そんなに重要ではないと感じられるかもしれません。いわゆる教科書的な内容が書かれているだけではないかと思われるかもしれません。しかし、西田の場合はそうではありません。実は『善の研究』の第二編と第三編が、実は四高での倫理講義の講義ノートだったと言われているのです。

ですから、今お見せしていた京大での倫理学講義ノートは、言わば『善の研究』の続編といいますか、『善の研究』で論じていたことを、さらに洗練させたものだと見ることができるわけです。また、『善の研究』には有名な「純粋経験」という言葉がありますけれども、実はこの「純粋経験」という言葉、西田は京都に行ってから、だんだん使わなくなっていくのです。それで、この倫理学講義ノートは「純粋経験」という言葉が使われている最後の時期のテクストという意味も持っています。どうして「純粋経験」という言葉が使われなくなったのか、西田の立場が変わっていくプロセスを捉える貴重な資料にもなっているかなと思います。

もう一回、事務的な話に戻りまして、資料の公開とか活用に関してどういうことをしたのか報告をいたします。哲学館では、いろんな方向で公開といいますか、活用したわけですが、特に二〇二〇年が西田幾多郎の生誕一五〇年の年だったということで、そこに向けて様々な公開を仕掛けていったという経緯があります。

まず、二〇一八年三月に報告書を刊行しまして、その後、

毎年刊行しています。第一部は修復とか翻刻の経過です。いわゆる事業報告です。第二部は寄稿で、翻刻に関わっていただいた方とか、あるいは修復に関わっていただいた方に寄稿をしてもらうパートです。そして、これが一番重要ですが、第三部に翻刻のパートをもうけました。実際に翻刻をしたテクストをここに載せたり、資料調査の結果を掲載したりという形で、少しずつ翻刻を進めてまいりました。

こういう報告書に出すだけではなくて、重要な資料に関してはちゃんと出版したいということで、先ほどお話をしていた倫理学講義ノートと宗教学講義ノートについては、西田幾多郎の全集が岩波書店から出ているわけですけれども、その別巻として二〇二〇年に刊行いたしました。全集にならないと研究者はなかなか利用してくれないところがありますので、重要なことだったと思います。

もう一つが、デジタルアーカイブの公開です。これは二〇二一年三月にやっております。

そのほか、これはあまり学術的ではないかもしれませんが、博物館ですので、企画展示で幾つか展示をいたしました。そこではレプリカを使った展示をしました。と言いますのも、資料の多くにカビが発生していることがありますので、そのまま展示することはとてもできないのです。

さらに、グッズを作ったりもしました。西田幾多郎の倫理学講義ノート、それから思索ノートの中から「Gedanken」と書かれたノートを、表紙とその形をそのまま現物に合わせ作成し、販売したものです。ノートの中にも、こんなふうに西田の直筆そのものを最初の二ページぐらい入れまして、その後は白紙になっています。購入いただいた方に普通のノートとして使っていただけるので、西田が書き始めたノートを購入者が書き続けていく趣向になっています。このようにさまざまな仕方で活用してきたということです。

次に、恐らく皆さんがひょっとしたら一番関心があるかもしれないところで、翻刻の進め方についてお話をしたいと思います。

翻刻の方針を固めるにあたって、この資料の特徴を考えました。まず、①これが哲学分野の資料だということです。私の偏見かもしれませんが、哲学の研究者の多くは手書きの資料を読まないのです。私も哲学館に行くまでそうでしたけれども、ほとんど全集しか使わない。活字しか読まないわけです。これが、例えば国文学とか歴史の研究者は、手書き資料を使うのは当然だという感覚があると思います。それに対して、哲学の研究者の多くは、翻刻された、活字になったものしかアプローチできない可能性があることを前提に、翻刻しないといけないと考えました。

もう一つの特徴は②非常に劣化し、カビがあって保存に注意が必要なものだということです。そうしますと原資料を個々の研究者が読むことは基本的にもうできない。そんなことをすれば、資料が損壊してしまうわけです。ですから画像で公開するか、あるいは翻刻を読むかになります。そして、そもそも判読ができるかどうかという問題もありました。非常に状態が悪くてインクがかすれたりにじんだりして、カビも発生していることで読みにくい資料です。ですので、正確に翻刻を行うためには、いろいろ工夫が必要でして、特に我々がやりましたのは、西田が引用したり参照したりした書籍を見つけ出して、それと照らし合わせながら翻刻をしていくことです。それで信憑性の高い活字化をしようとしたわけです。

さらにもう一つの特徴は、③基本的には日本語で書かれたようなものであっても、英語やドイツ語などの欧文が多い。講義ノートとか思索ノート、これは基本的に日本語で書かれているわけですが、しかし重要な多くの名詞は欧米語で表記されていて、しかも多くの場合は省略をされている。頭文字しか書かれていないとか、最初の数文字しか書いてないというものがかなり多い。これについては、省略を補って読みやすくするような工夫が必要だというところがありました。

最後に、先ほどの、西田が引用したり参照したりした書籍を参照する話と絡むんですが、直筆ノートの中では欧語がそのまま残されて書かれているところがありまして、そのおかげで④出典を探すことは結構やりやすかったということがあります。実際、西田が刊行した論文では、そういったところは日本語に直されるわけです。欧語はなくなってしまっているので出典を探ることは難しくなっている。ところが直筆ノートからであれば、出典をたどることが結構簡単にできる。

このような特徴がありましたので、まず読みやすくしないといけないことがある一方で、翻刻にしかアプローチできない研究者が多いだろうと予想されるために、原資料に対して厳密な翻刻をしないといけない。翻刻だけを見ていても原資料がある程度分かるような、研究に耐えるようなものにする必要がある。それで、いろいろ補いはしたのですが、補うときには補ったと分かるような形にしよう、そういう方針でやりました。もう一つの方針としては、先ほどの出典の調査です。資料の正確性を保つためにという意味でも、出典調査をかなり力を入れてやりました。そのおかげで翻刻したものについてはかなり出典が、「この部分はここを参照している」と分かるような形になりましたので、注という形で情報を残しました。

では、実際にどういう体制で翻刻をしたのか。我々は、作業を階層化して進めました。といいますのは、まず資料が非

常に多かった。それから我々の場合には、二〇二〇年の西田の生誕一五〇年に間に合わせるために、かなりスピード感を持ってやらないといけないという事情もあったからです。それで、作業を、一次翻刻、二次翻刻という形で階層化いたしまして、まず一次翻刻ではあらあらとした形で構わないので、多くの資料をスピード感をもって翻刻しました。これに関しては哲学館のスタッフで行うのではなくて、京都大学の林晋先生、金沢大学の森雅秀先生の御協力の下、それぞれの大学の学部生徒とか大学院生、ＯＢの方でチームを作っていただいて、そちらに業務委託をする形で一気に翻刻を進めることをいたしました。これが一次翻刻です。

そうして、あらあらとした形であれ、大量の翻刻をまず作りまして、その中から重要そうなものを二次翻刻として進めました。ここには西田哲学館の関係者、西田哲学の研究者、あるいは哲学とか宗教哲学の研究者に入ってもらいまして、三人で一つのチームを作りまして、読み合わせをしながらさらにブラッシュアップをする作業をいたしました。

その際にsmart-gsという林晋先生が作られたソフトを使って作業をいたしました。今、画面で見ていただいているものです。たとえば画面の右側にノートの画像を出して、左側のスペースに翻刻をするということができます。このソフトを紹介すると「これは自動で翻刻できるんですか」と聞かれるのですが、そういうものではありません。あくまでこれは全部手で打ち込んでいきます。重要なのは何かと言いますと、このツールを使うと、みんなで共同作業がしやすくなるということです。翻刻で使われる画像はかなり重たいものです。特に、読みにくい資料ですと結構拡大をして読んだりしますので、やはり画質がよくなければならない。それで画像が非常に重たいのです。もし、例えば写真データとかあるいはＰＤＦデータに、直にテクストを入れていったりしますと、データが非常に重たくなってしまう。これでは共同作業ができないのです。smart-gsのデータはどうなっているかといいますと、画像のデータと翻刻のデータが別々になっておりまして、画像データは各自が手元に持っておく形になっている。その状態で、この翻刻のデータだけをみんなで共有し合いながら共同作業をする。そういう仕組みになっております。

実際、私は京大にいる研究員と三人で作業しました。そういうのができるのがsmart-gsの翻刻の強みかなと思います。そして、強調しておきたいのですが、そもそも翻刻をするときは一人ではどうしても読み切れないところがあります。ですから、二～三人でやるのがいいのかなと思います。

今、二次翻刻作業中の画面を見ていただいておりますが、色のついた文字で書かれているのが二次翻刻で修正が入った部分であると思ってもらえればいいかなと思います。注を入

れたり、補ったり、修正をしたりしています。

二次翻刻の後に、さらに出版に向けて体裁を整えていく作業をしています。それはどういうことかというと、二次翻刻というのは、ノートを見たままに翻刻しているので、ノートの端っこまで行ったら、折り返ってくるのです。そこには段落という概念がないのです。これをちゃんと読める形にすることで段落を整えていって、さらに体裁を整えていく作業が必要です。

このように一次翻刻、二次翻刻、それから校訂編集作業と、最終的な編集作業をやって、まずは報告書という形で翻刻を出す。さらにそれをブラッシュアップして、全集を目指していく、そんな形で作業を進めてまいりました。

最後に少し、資料研究の可能性についてお話をしたいと思います。まず、こちらの資料には、これまでこの資料を使った研究にはどういうものがあるのかを書かせていただきました。タイトルだけ見ていただければ分かると思いますけれども、私自身が出した論文とか、吉野さんという方（二次翻刻を手伝っていただいた方です）が書かれたもの、いわば翻刻プロジェクト内部の人間が書いているものが多いですけど、一部外部の方に書いていただいたものもあります。

一つ紹介いたしますと、大橋容一郎先生の論文があります。大橋容一郎「明治前期における論理学の位相―西周、清野勉とカント論理学―」（『思想』一一七〇、岩波書店、二〇二一年一〇月）。明治前期の論理学の日本における受容を主題として論じながら、その中で、その後の明治後期の状況についても触れられています。大橋先生は、先ほどのデジタルアーカイブを御覧いただいて、西田の論理講義ノートに触れ、西田が講義の中でどういう論理学者の名前を挙げているかを紹介されています。

もう一つ。橋爪博幸「学校教育で推進されるべき自然共生系の理解―ミツバチの活動に魅せられたメーテルリンクの著述を出発点として―」（『桐生大学教職課程年報』第五号、二〇二二年三月）。不思議ですけれども、この橋爪先生（教育学の専門の方だと思います）が西田の読書ノートといいますか、抜粋集を取り上げてくださっています。橋爪先生は、西田が抜粋集の中でメーテルリンクを書き出していることに注目して、西田がなぜそこに関心を持ったのかを分析されています。珍しい例かなと思いましたので、入れさせていただきました。

まだ数は少ないですけれども、これまでの事例を見たうえで、どういうところに資料研究の可能性があるのか、考えてみました。四つほどあるかと思います。一つは「出典研究」です。出典が分かるのは、やっぱり研究の上では非常に大き

な強みになります。これは私の論文もそうですし、吉野さんの論文もそういう強みを生かして書かれていたと思います。

二つめは「東洋思想の影響」です。実は、西田は自分自身が刊行した論文の中では、あまり儒教的なものとか仏教的なものは、そんなにはっきり書かない人です。自分は西洋哲学の研究者だという思いが多分あったのだと思います。ところが、こういう直筆資料の中には、そういった東洋的な言説がかなり素直に出ている部分もあります。これは西田の思索の背景を知るという意味で、非常におもしろいのではないかなと思います。

三つめに「哲学教育史」と書きました。特に西田哲学の研究をしていますと、西田の独創的な部分ばかりに目を向けるわけですが、そうではなくて、西田も講義ノートの中では、ある意味では標準的な、当時の一般的な教育を行ったりもしていたと思います。当時の一般的な潮流とか標準的な教育体制を知ることも、それ自体が重要ではないかなと思うわけです。講義ノートとか受講ノートは、そういう研究の対象になるかと思います。

もう一つ、「他分野との協働」としておきました。先ほどの橋爪先生の例ですが、デジタルアーカイブを整備いたしますと検索かけられますので、思わぬところで検索したら引っかかったりする。そのおかげで、他分野からも利用されうる資料になっている。そういう可能性もおもしろい点なのかなと思っています。

すみません、ちょっと時間過ぎてしまいましたけれども、これで私の話を終わりたいと思います。ありがとうございます。

○司会　中嶋先生、ありがとうございました。続いて小浜先生よろしくお願いします。

○小浜　小浜でございます。よろしくお願いします。

早速始めさせていただきます。お手元に配布資料があると思いますが、基本的にはこれを読みながら、プロジェクター画像をも利用しつつ、お話しさせていただきます。

まず、九鬼家と中橋家のことをお話しします。九鬼家の家長であった九鬼隆一（一八五二―一九三一）は、元摂津の国三田藩の武士星崎貞幹（さだもと）の次男として生まれ、八歳で丹波の国綾部藩の家老九鬼隆周（たかちか）の養嗣子となりました。明治維新後は福沢諭吉に師事、その後文部少輔（しょう）として仕官します。

隆一は、駐米特命全権公使に転出しワシントンに赴任します（一八八四年）。彼は米国で身ごもった妻波津子（一八五九―一九三一）を文部省時代の部下岡倉天心（岡倉覚三：一八六二―一九一三）に託し、海路、帰国させることになりま

した。これが一大スキャンダルを引き起こす誘因となり、周造はそのスキャンダルの渦中の一八八八年二月一五日、東京で生を享けました。

波津子は京都の花柳界祇園あるいは先斗町（ぽんとちょう）、あるいは東京の新橋花街の出とされますが、諸説あります（岡倉一雄、松本清張、大岡信）。なお、一九〇〇年八月二〇日に隆一とは離婚しています。

九鬼周造（一八八八―一九四一）の著作としては、フランスの出版社から出した *Propos sur le temps*, 1928（『時間論』）のほか、『「いき」の構造』（一九三〇年）、『日本詩の押韻』（一九三一年）、『偶然性の問題』（一九三五年）、『人間と実存』（一九三九年）、『文芸論』（一九四一年）などがあります。九鬼哲学は三つの大きな根本問題を主題にしています。「時間論」と「押韻論」、そして「偶然性の問題」がそれです。

周造は、早逝した九鬼家の次男一造の妻であった縫子（一八九五―一九八二）と結婚しました（一九一八年四月）。縫子は再婚になります。一九二一年一〇月から二九年一月にわたって、足かけ八年間、周造は縫子とともにドイツ、フランスを中心としたヨーロッパ留学に旅立ちます。

一九三一年、父隆一及び母波津子、両親とも同じ年に他界します。そして、この頃に周造と縫子の離婚話が起こっています。周造の縫子宛未公開書簡草稿によれば、次兄一造と縫子とのあいだに生まれ、十四、五歳になっていた長男隆一郎が「自分たち子供を取るか、周造を取るか」と母・縫子に迫っていたようです。縫子は息子と周造とのあいだで「板挟み」状態だったらしいのです。また、ある時期以降、縫子の母中橋ゑつ（悦子）も長兄・武一も離婚を勧めていたようです。およそ八年後の一九三九年、周造と縫子は離婚することになりました。

次に、九鬼家の菩提寺について。兵庫県の三田市に心月院という古刹があります。その墓地には隆一、哲造、一造、その妻縫子、そして一造と縫子の間の二人の子、隆一郎と隆造が埋葬されています。長男哲造は、隆一の先妻、農子（たみこ）との間の子です。縫子については「九鬼一造　室　縫子」と墓石には刻まれています。つまり周造のではなくて一造の妻として併記されて、同じ墓に埋葬されています。

なお、波津子は東京駒込の染井墓地に、岡倉天心の墓のすぐ近く、「星崎波津子」という墓碑名で埋葬されていましたが、私が何年か前に訪ねたとき、よそに移されたのか、それは確認できませんでした。その墓が九鬼姓ではなくて星崎姓になっていたのは、波津子は隆一と結婚する前に、「杉山」という家から隆一の兄、星崎琢磨の養女になっていたという経緯があって、隆一と離婚（一九〇〇年）の後にその旧姓（星崎）に復していたということです。周造自身は、京都市左京

区鹿ケ谷（ししがたに）法然院の墓地に埋葬されました。墓碑名は西田幾多郎の揮毫によります。ちなみに法然院の墓地には、谷崎潤一郎、内藤湖南、河上肇などの墓もあります。

簡単に、中橋家について。家長は徳五郎（一八六一―一九三四）で、大阪市議会議長や大阪商船社長、原敬内閣ほかの大臣を歴任しています。妻は「ゑつ」ですが、周造は書簡の中で「悦子」という表記も使っています。長男が武一、次男が謹二、長女が縫子です。

次に、甲南大学の「九鬼周造文庫」所蔵の未公開書簡についてお話しします。九鬼宛ての書簡が一八八通、九鬼による書簡や電報の草稿ほか九〇通、計二七八通が所蔵されています。未確定部分がありますが、ほぼこれですべてと言っていいと思います。

書簡の中には、岩元禎、西田幾多郎、田邊元、桑木厳翼、天野貞祐、岩下壮一、和辻哲郎などの哲学者たち、またH・ベルクソンやK・レーヴィットといったヨーロッパの哲学者たちからの、フランス語、ドイツ語の書簡もあります。レーヴィットのために書かれたハイデッガーやヤスパースのドイツ語推薦状、そしてローマ大学のジョヴァンニ・ジェンティーレのイタリア語推薦状も含まれています。これらが公刊されれば本邦のみならず世界においても初公開ということになり、貴重な資料として注目されることになるでしょう。

文学者としては林芙美子、中河与一、山口誓子、この三人（だけ）です。林芙美子（一九〇三―一九五一）は、どうして周造との関係ができたかという点について詳細は分かりませんが、とりあえずここで林芙美子から九鬼に宛てた書簡画像を映します。

これ［画像］が、林芙美子の九鬼宛ての書簡です。真ん中辺りに、「あなた（九鬼）の『偶然性の問題』を愛読している」とか、その後に、「私はあなたを本当に知りたい」「私は熱心な読者」だとか書いています。おそらく『偶然性の問題』の根底にある思想との関係で二人はつながりができたし、それから結構長く付き合いが続いたものと思われます。

「偶然性の問題」というのは、「存在と無の問題」とも言い換えられます。なぜかといえば、「偶」とは「たまたま」、「然」とは「しかる（しかある）」すなわち「そうである」という意味です。だから、「偶然性」とは「たまたましかあること」という意味です。ということは、「偶然性」という言葉には、その裏面に「そうでないこともありうる」という意味が含意されていることになるからです。人間に即していうと「生と死の問題」です。生は最初から最後まで偶然です。「生」と「死」は裏腹になっています。「生きる」ということの意味については、「死ぬ」ということの意味を考えないと、

本当はその生きるということの意味も考えられない。

九鬼は人間を「無の深淵」（Abgrund des Nichts）の上に浮遊する存在という言い方をしますが、人間は壊れやすい仮小屋に住んでいる存在だということです。非常にはかなく、もろい、絶えず無（死）にさらされた存在だ（人間はふだんそのことを忘れていますが）、と。そういう点で、九鬼と林芙美子は、世界観というか人生観を共有していたということがあったのだろうと思います。そういうふうに『偶然性の問題』を読む人はほとんどいませんが、偶然性という問題を九鬼が取り上げた根底には、そうした人間・世界観があったのだと思うのです。そして、まさに『放浪記』や『浮雲』の著者林芙美子は『偶然性の問題』の根底にある思想、すなわち、「私」の存在は「無の深淵の上にさしかけられたもろくはかない存在」、「私」の生は「死と裏腹になった生」だという思想に深い共感を持っていたと思われます。「富岡は、まるで、浮き雲のような、己の姿を考えていた。それは何時、何処かで、消えるともなく消えてゆく、浮雲である」（『浮雲』六七）。

京都帝大の同僚からの書簡としては、田邊元、朝永三十郎、波多野精一、天野貞祐、新村出ほかからのものがあります。朝永三十郎は、物理学の素粒子論でノーベル章を受賞した朝永振一郎の親御さんです。

私がこれらの書簡の翻刻・注解を行いながら感じたのは、それらの同僚の中で心置きなく一番楽しい付き合いをしていたのは新村出（一八七六―一九六七）ではなかったかということです。新村は『広辞苑』の編纂者として有名ですが、エスペランティストでもあったし、さらに、花木、植物をとても愛していて、歌も作っています。

他方で、九鬼も、実は中学校のとき以来ですが、大学の文学部を出てからも理学部に入り直して植物学者になろうかと思っていたとさえいうほどに、また、留学先のハイデルベルクでも夏休みにアルプスへ出かけて植物採集に熱中したほどに、花木に対する愛が強く、花木に対する愛情という点でお互いの心が通じたのだと思います。

九鬼は信州の戸隠山（とがくしやま）で採取した白いライラックをこのような［画像にあるような］標本にして、京都の新村に贈ったようです。新村の『牡丹の園：歌集』（一九五二（昭和二七）年六月一五日）には、「九鬼周造博士七回忌　法然院」と題した歌が収録されています。「戸隠ゆ白リラを賜（た）びし君なりき白玉椿いまぞ手向くる」。

友人からの書簡もいろいろあります。中世哲学研究者でキリスト者の岩下壮一、カント研究の天野貞祐、美術史家で白樺派の画家でもあった児島喜久雄、ドイツ文学の立澤剛など、それぞれがユニークな人物ですが、彼らの書簡です。九鬼の一番親しい友人は岩下壮一（一八八九―一九四〇）だっただ

ろうと思います。岩下とは、竹馬の友のような付き合いでした。岩下は、哲学者として将来を嘱望され、ヨーロッパへ留学したのですが、その地でカトリックの司祭になって帰国し、富士山麓の神山復生病院院長としてハンセン病患者の福祉に尽力しました。『信仰の遺産』（一九四一年）、『中世哲学思想史研究』（一九四二年）などの著作もあります。

天野貞祐（一八八四―一九八〇）は甲南高校の校長や文部大臣を務めたりしましたが、カント哲学、特にその倫理学に親炙した人でした。天野は、自分にも厳しいが人にも厳しいという感じの人だったようで、非常に厳格過ぎるという感じがないことはなかったようです。次の詩はパリ時代のものですが、留学先のドイツから先に帰国していた天野について、九鬼がそのような感覚を持っていたことを垣間見せてくれるような内容だと思います。「さう言えばA〔天野〕は今頃何をしているだろう、日本へ帰ってからもう一年たった夏休み後の新学期、カントの倫理学の講義でもしているか、あれ程の道徳的人格は滅多にないな、どんなに疲れた晩でも『汝の義務を為せ』と言ってねむい目を擦りながら翌日の講義の調べをする人だ、断言的命令（カテゴリシェルインペラティフ）があれまで生きた力になっている性格を君は他に見た事があるか……」。九鬼にとって天野は文字通り「畏友」といっていいような関係だったと思います。

九鬼家の親族では、三男の三郎と姉の光子から周造宛て書簡が届いていますが、いずれも周造の著作『「いき」の構造』を受領したことへの礼状です。

それから中橋家に関わる書簡としては、義母ゑつ、長男の武一、妻の縫子、この三人に宛てた周造の書簡の草稿が残っています。これらには「マル秘」がつくような内容が含まれていて、主に縫子との離婚問題、それから中橋家と周造との間の、また九鬼家親族間の遺産処理問題などに関わる書簡類で、これについては、今回は触れることはできません。

以上の中から、『九鬼周造全集』（岩波書店）からはほとんど知ることのできない九鬼の側面に関わる次の書簡、［配布資料の］一「ベルクソンと九鬼」、二「林芙美子と九鬼」、三「K・レーヴィット、M・ハイデッガー、K・ヤスパースと九鬼」、四「岩下壮一と九鬼」、五「新村出と九鬼」、六「中橋家と九鬼」関係書簡を取り上げて、いろいろ触れてみたいのですが、実はどれを取り上げても切りがありません。とても時間内に収まりそうにないので、そのうち、今回は特に一の「ベルクソンと九鬼」のフランス語書簡を取り上げてみたいと思います。

その前に、上述の三「K・レーヴィット、M・ハイデッガー、K・ヤスパースと九鬼」についてだけ、それに関わる書簡画像を映しながら、一応簡単に触れておきたいと思いま

す。

まずカール・レーヴィット（一八九七―一九七三）からの書簡画像です。レーヴィットはユダヤ系のドイツ人で、第一次世界大戦後にナチスが台頭した頃に、ナチスから職を追われます。ハイデッガーのもとで、九鬼とレーヴィットは一緒に共同研究を行っていました。九鬼が日本に帰って、ちょうどナチスが台頭し、レーヴィットが職を追われて、もう行くところがなくなったようです。そこで彼は、日本に職はないかといったようなことを九鬼に尋ねてきます。このドイツ語書簡（一九三六年一月二日付と四月二三日付の二通）からは、レーヴィットの、非常に切迫した心境が窺われます。

その書簡を受け取った九鬼は、おそらく「それでは日本で尽力してみる」といったような内容の返信を出したのだと思います。それに応じて、レーヴィットは自分の履歴書や業績表、そして、予め得て手元に置いていたものと思われる、ハイデッガー（一九三四年一〇月二三日付）やヤスパース（一九三四年一〇月一七日付）からの推薦状などを同封して九鬼に送ってきました。また、イタリア・ファシズムの理論的創始者とされる哲学者であり、政治家でもあったローマ大学のジョヴァンニ・ジェンティーレ（Giovanni Gentile: 1875―1944）のイタリア語による推薦状（一九三五年三月二五日付）も同封されていました。レーヴィットは研究のためロックフェラー財団から得た奨学金でローマに滞在していたのですが、上のレーヴィットから九鬼宛書簡はそのローマで書かれたものでした。彼は、その奨学金の受給も終わりかけていると書いていますが、いよいよ窮地に陥りつつある状況が窺われます。

ヤスパースの推薦書には、レーヴィットについて、自分はレーヴィットが学生であった頃からよく知っている、彼は社会学や精神分析学ほか、その研究領域は多面的で、また教育活動でもよい仕事をしているといったようなことが書かれています。

ハイデッガーの推薦書には、「彼（レーヴィット）の専門領域は、歴史的には一九世紀で、体系的には社会学と人間学です。彼は教育活動において、活きいきとして感銘深い大学講師としてふさわしい大きな熟練度を得ることになりました」などと書かれています。ちなみに、レーヴィットは、一九三六年六月に日本から招聘の電報を受け取り、一一月に東北大学哲学科講師に着任、しかし、日独伊三国同盟ゆえに、四一年には米国へ転じざるをえなくなりました。

なお、今回九鬼の未公開書簡の翻刻と注解を行いながら感じた点を一つ。九鬼とレーヴィット、そしてハイデッガー、これら直接面識のあった三人の関係者の仕事を改めて振り返ってみますと、彼らに、あるいは彼らの時代に共通する一

つの大きな哲学的テーマがあったことが窺われます。「ニヒリズム」（Nihilismus）と「同一のものの永遠回帰」（die ewige Wiederkunft des Gleichen）の思想がそれです。九鬼の『時間論』（*Propos sur Temps*, 1928）は、レーヴィットの『同一のものの永遠回帰というニーチェの哲学』（*Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkunft des Gleichen*, 1935）やハイデッガーの『ニーチェ』（*Nietzsche*, 1961）が提示した思想を先取りしている、あるいはむしろレーヴィットやハイデッガーとは異なった、全く独自の視点からその思想の解明を試みているとさえいえるかもしれません。というのは、九鬼の『時間論』は、まさに「同一のものの永遠回帰」（「輪廻」）という思想を究極にまで徹底することによって「ニヒリズム」（「苦界」という世界観）を超克する方途を提示することをテーマとしているからです。その独自性は西洋人から見れば驚くべきものであったに違いありません。『時間論』や論考「形而上学的時間」の読み直しが必要です。

次に、ベルクソンと九鬼について、特に〈Bergson au Japon〉と、それに対するベルクソンから九鬼への礼状についてお話しします。

未公開書簡の中に石井菊次郎（一八六六―一九四五）関係のものもあります。九鬼は、第二次大隈重信内閣の外相（一九一五）を務め、さらにフランス大使（一九二〇）であると同時に国際連盟の日本代表をも務めた石井の紹介を通して、ベルクソンとの議論の機会を得ていました。ベルクソンは第一次大戦後の一九二二年、国際連盟の諮問機関として設立され、現在のユネスコの源流となった「国際知的協力委員会」委員に任命され、第一回会合では議長を務め、石井や当時の国際連盟事務次長であり、『武士道』（*Bushido: The Soul of Japan*）の著者でもある新渡戸稲造とも面識があったのです。

プロジェクターに映されている画像は九鬼からベルクソンに宛てた書簡です。九鬼はドイツ、フランスに足掛け八年、それぞれ二回ずつ滞在していました。第一回フランス滞在中にベルクソンと会話を交わす機会があり、それに対して九鬼からベルクソンに宛てたフランス語による礼状です。プラトンのことやカントの超越論哲学について少し触れ、九鬼が訪問時、ちょうどベルクソンはリウマチか何かで非常に重い病気にかかっていたにも関わらず話をする機会を設けてくれたことに感謝するといったような、そういう内容の礼状です。この書簡の日付は一九二七年一月四日となっていますから、第一回目のパリ滞在時のものであります。その本文中には、「昨日の私たちの会話」（notre entretien *d'hier*）というフランス語が使われているので、ここから、九鬼とベルクソンとの最初の出会いは、一九二七年一月三日であったことが知ら

れます。

もう一つは、九鬼が書いた〈Bergson au Japon〉（「日本におけるベルクソン」）に関してベルクソンが九鬼へ宛てた礼状です。きょうは、ベルクソンが九鬼に宛てたこのフランス語書簡（礼状）の方について、少し詳しく説明していきたいと思います。

九鬼が二回目にベルクソンに会ったのは、一九二八年八月にパリ近郊のポンティニーで二つのフランス語講演〈La notion du temps et la reprise sur le temps en Orient〉と〈L'expression de l'infini dans l'art japonais〉を行なった後の、秋頃でした。その際九鬼は、ベルクソンのノーベル賞受賞記念号として発刊されるLes Nouvelles Littéraires紙から寄稿を依頼されました。それに応じて書かれた短論文が〈Bergson au Japon〉であり、これは一二月一五日付同紙に掲載されました。そのことが機縁になって九鬼はベルクソンからたびたび手紙をもらったといいます。残念ながら「九鬼周造文庫」にそれらは見出せませんが。

ところで、ベルクソンはその九鬼宛礼状の中で、九鬼が寄稿した〈Bergson au Japon〉に対して謝意を示し、その内容に高い評価を与えているのですが、これは決して単なる形式的なお礼のためのお世辞ではありません。〈Bergson au Japon〉において九鬼は、まさにベルクソンの礼状の中での適切な言葉を使っていいますと、「フランスの哲学のみならず、一般にヨーロッパの哲学に対する日本の思想の態度」を「極度の簡潔と極度の正確をもって数ページの中に述べ」、「かつまたその態度の理由を吾々に理解させ」、「東洋と西洋との関係について、不思議に暗示的な言葉で文を結」んでいます。ベルクソンは、九鬼の〈Bergson au Japon〉は、東西比較思想論として甚だ興味ある内容を含むものだと指摘します。私もこれまで何回も〈Bergson au Japon〉を読んではいたのですが、この礼状でベルクソンが指摘していることに触発されて、改めて〈Bergson au Japon〉を読み直してみますと、地理的、文化的に西洋から遠く離れた日本で独自に育まれてきた思想ないし思考方法と、ドイツのカントやフランスのベルクソンに見られるような、いわば生粋の西洋思想ないし思考方法とがゆくりなく符合するのはなぜなのかという、そこでの九鬼の問いとそれに対しての彼の回答は、日本人にとってだけではなくて、ベルクソンにとっても極めて新鮮な驚きであったに違いないという思いを強くさせます。また、さらに〈Bergson au Japon〉が「東西比較思想論」としても、珠玉の論考であることをも改めて確認させられました。

ところで九鬼は、〈Bergson au Japon〉を、アメリカのペリー来航によって日本の鎖国が解かれた出来事から書き始めます。日本人が「西洋哲学」として最初に触れたのは必然的

にアングロ・アメリカのそれ、つまり「功利主義」（utilitarisme）、そして引き続いて「プラグマティズム」（pragmatisme）でした。しかし、日本人はそれらの特質である相対主義（relativisme）に満足することはできませんでした。九鬼によれば、一八八五年頃、ドイツ哲学が日本に入ってきて、特にカントの超越論哲学（la philosophie transcendantale）、道徳哲学が深い尊敬の念をもって受容されたといいます。そして、新カント派の論理主義も熱心に研究されたのですが、一九一〇年頃、突然ベルクソンの名が登場したとされます。「我々のもとで彼の果たした役割は、主として形而上学への意欲を駆り立てたことであった。ドイツ新カント派の批判的形式主義によってあまりにも干からびさせられた我々の精神は、ベルクソンの形而上学的直観（l'intuition métaphysique bergsonienne）という『天恵の慈雨』を迎え入れたのであった。〔中略〕そして、おそらく現在の日本で最も深い思索者である西田〔幾多郎〕の哲学は、超越論哲学とベルクソン哲学の総合への努力として現れている」（九鬼全集、第一巻、四三七頁）と九鬼は書いています。彼は、ベルクソン哲学によって日本にもたらされた結果として二点指摘します。一つは、日本人が、ベルクソン哲学によって新カント主義から「現象学」（phénoménologie）へ導かれたこと、そしてもう一つは、ルソーやコントだけではなく、ブートルー（「偶然」contingence の哲学）やラヴェッソン（「習慣」l'habitude の観念）やメーヌ・ド・ビラン（「直接知覚」aperception immédiate の方法）など、フランスの哲学一般を評価することへ促されたことであるといいます。

以上のように論じて、九鬼は問います。「一体、何故に我々は功利主義に本能的な反発を感ずるのであろうか。何故にカントはかくも大きな影響を我々に及ぼしているのであろうか。何故にベルクソン氏は日本でかくも尊重されるのであろうか」（同、四三八〜四三九頁）。九鬼は、日本にはもともと主要な二つの思想の流れがあると主張します。

一つは武士道に基づく「絶対的精神の信仰」（le culte de l'esprit absolu）、「物質的なるものの無視」（le mépris du matériel）、すなわち、「善意志」（“la bonne volonté”）の理想主義的道徳ですが、それは、カント哲学の、特にその道徳哲学受容の必要不可欠の条件であったと指摘します。なお、九鬼全集版の〈Bergson au Japon〉の日本語訳では “la bonne volonté” は「意気」と意訳されています（その適否はここでは問わないが、私としてはやはり「善意志」と直訳すべきだと思います）。九鬼が「武士道」の倫理道徳として “la bonne volonté” を挙げているからだろうと思います。しかし、九鬼がこの “la bonne volonté” という言葉を使った時、かれが念頭に置いていたのは、明らかにカントの『道徳形而上学原論』

Grundlegung zur Metaphysik der Sitten の第一章の、あの有名な、格調高い冒頭文です。「およそこの世界においては、いやそれどころかこの世界の外においても、無制限によいとみなされうるものは、ただ善意志（guter Wille: der gute Wille: la bonne volonté）以外には何も考えられない」。九鬼によれば、カントのこの「善意志」の思想が日本に受け容れられたのは、もともと武士道の「絶対的精神の信仰」が素地としてあり、そこに親和性があったからだというのです。

もう一つは、禅仏教の「禅定（ぜんじょう）」（dhyāna）あるいは「瞑想」（méditation）、すなわち絶対を直観によって把えようとする努力であって、これはベルクソン哲学が日本に受容されるための条件であったといいます。ベルクソンによれば、「純粋持続」（durée pure）は直観（intuition）によってのみ把えられるもので、これを言語に翻訳することはできない。ここに九鬼は、言語化の限界を指摘する禅仏教の瞑想の方法との明らかな親和性をみています。方法のみならず内容においてもベルクソン哲学は仏教思想と大いなる類似性を持つといいます。第一に、「水の流れ」のイメージにおいて示されるベルクソンの持続の観念は、「諸行無常、生成流転」という仏教の根本観念でもあります。第二に、ベルクソン哲学は「二律背反の定立と反定立とを、同時に同一の地盤に受け入れる」可能性を認めるが、それは、涅槃即仏陀（Nirvāna est Boud-dha）、無即有（Néant est Être）という禅語録にある逆説的真理に完全に近いと書きます。

ただ、この点が重要なのですが、九鬼によれば、この類似性は、完全に独立しているものの間で見られるそれであるということです。そうでありながら両者が親和性を示しているというこの事実こそ、ベルクソン哲学が日本人を惹きつける魅力の根源であるといいます。それに対し、当時日本人に人気のあったショーペンハウアーとニーチェの場合、日本人〔九鬼〕からみれば、彼らの哲学を西洋的な哲学とみなすには余りに東洋の影響がありすぎる。それに対して、「ベルクソン氏は西洋的特質の限界内にとどまっている故に一層我々を惹きつけるのである」と九鬼はいいます。ベルクソンはショーペンハウアーやニーチェとは違って東洋思想とは全く無縁の思想的風土の中で、すなわち純粋に西洋的な思想的風土の中で思索し、独自の思想に到達した。それにもかかわらず、結果として、我々は、ショーペンハウアーやニーチェの思想の中に以上に、ベルクソンの思想の中に東洋の思想に通じるものを見て驚き、共感を覚えるというわけです。

なぜ日本は、遠く離れた地理的・文化的・思想的基盤の中で生み出されたカントやベルクソンの哲学によってかくも大きな影響を受け、それらを尊重するのでしょうか。その理由を、単に明治維新以来、欧米先進諸国の思想・文化を導入し

ようとしていた日本の文化政策にのみ求めることはできないと思われます。なぜなら英米の思想は重用されなかったからです。そこにはやはり取捨選択があったと考えざるをえません。カントやベルクソンの哲学が日本に受け容れられた最大の理由は、何の違和感もなく、それらに共鳴し、その素地のもとにそれらを受け容れて十分に消化吸収するだけの、独自の思想的基盤がすでに日本にあったからだというのが九鬼の主張です（逆に英米の思想はもともと日本の文化・思想的風土にはなじまないものであった）。これほどユニークで適切なカント・ベルクソン評、さらにそれを超えて、西洋哲学と日本思想との比較論を私は知りません。日本近代哲学史上、ハイデッガーにのみならずベルクソンにもこれほど強い印象を与え、これほど高い評価を彼らから得ていた日本の哲学者は他にいないと思われます。早逝が惜しまれます。享年五三歳でした。

〈Bergson au Japon〉の中で触れられるカント（一七二四―一八〇四）の「善意志」（guter Wille: la bonne volonté）について、配布資料に私が書いた趣旨をごく簡単にいうと、「嘘も方便」ということを認めるか否かということに関わります。カントの場合は絶対認めないと思います。嘘も方便などということはありえない、嘘はやはり嘘以外ではありえない。でも、やはり場合によっては、行為の結果を予測して、特に悪い結果が予想される場合、その場しのぎに事実に反することをいわざるをえないといったような事態が生じえます。脅迫などによる不慮の悲劇を避けるために、さしあたり事実に反することを口にすることも、場合によってはありうる、認められるだろうというのがプラグマティズム的な考え方。

「善意志」についてもう一つの例をあげてみます。サッカーのワールドカップが開催されています。今日か明日かに決勝があるはずです。日本のサポーターが、試合が終わった後に会場を掃除するとか、選手が控室を掃除する、日本チームの更衣室には大会スタッフに謝意を示すことばが残されていた、といったようなことが賞賛され、外国の人たちから「日本人はなぜそのようなことをするのだ」という問いかけがあったらしい。でも、日本人からすると、そうでない人もいるかもしれませんが、少なくとも私からすると、そういう問いには答えられないというか、なぜかといえば当たり前のこと、その意味で特段の理由があるわけではないからです。

つまりは、別に結果を考えて何かやるわけではなくて、こういうことをすれば、結果こうなるだろうといったような、結果を考えてやっているわけではなくて、ある意味、善意志でやっている、善意志にのっとってやっているとしかいいようがない。ある意味、他者のためではないし、自分のためでもない、その善意志のためにやっている。だからそういう意

味では理由がない。カントにとってと同様我々にとっても、「善行為」とは、ひたすら「善意志に発し」（von dem guten Willen）、「善意志に則って」（gemäß dem guten Willen）、「善意志のために」（für den guten Willen）行われる行為といっていいかもしれません。

次に、〈Bergson au Japon〉の中で触れられるベルクソンの「直観」（intuition）について。『『普遍的』『客観的』と云ふ文字も今日は皮肉に目礼をする」、「灰いろの抽象の世に住まんには濃きに過ぎたる煩悩の色」（全集第一巻、「巴里心景」、一八九頁）。これらは、パリへ移った九鬼がドイツのハイデルベルク時代を回想して詠った歌です。当時の、新カント学派の哲学に対する満たされぬ思いが吐露されています。「直観の哲学はうれし手にふるるHecceitasのかをりのゆゑに」（別巻、「短歌習作」、一一〇頁）。これも同じくパリ時代の歌で、新カント学派の哲学の後にベルクソンの哲学（「直観の哲学」）に出会った喜びを率直に詠っています。

九鬼がその歌で使っているラテン語〈Hecceitas〉は、遠く西洋中世時代のドンス・スコトゥス（一二六六？――一三〇八）とゆかりのある言葉ですが、女性名詞を指示するラテン語代名詞〈haec〉（英語の〈this〉）をもとにした抽象名詞であり、直訳すれば「これ・性」（Heccei-tas）です。すなわちそれは「個物（個体）性」（individualitas）を意味します。新カント学派の哲学を象徴する「抽象性」や「普遍性」に対して「具象性」や「個物性」（Hecceitas）を強調するベルクソン哲学への深い共感の心が表白された歌であります。九鬼は、本来は小文字で表記するはずの〈hecceitas〉を、この歌では大文字〈Hecceitas〉で表記していますが、これは意図的で、九鬼が「個物性」ということを特に強調したかったということの表れであろうと思います。そして、個物を個物としてありのままに把えるには直観によるほかないというわけです。

ベルクソンの「直観」をめぐってもう一つ例をあげます。「生命とは何か」と問われたときに、ある科学者は水槽から魚を採ってきて、それを俎板（まないた）や、実験台に乗せて、それを解剖して見せて、ここに心臓があって、ここに浮き袋があり……、といろいろ説明していって、生命の中枢は心臓のここだとかいったようにして、解答を試みようとすると思います。「分析」（analyse）という手法による説明・解答です。

でも、考えてみると、水槽から魚を採ってきて、メスや包丁で解体する。実は、その時点で生命は失われてなくなってしまっています。生命を亡くしておいて、「生命とは何か」という問いに答えようとしているわけです。しかし、それはおかしい、矛盾ではないか。「生命とは何か」というのは、それを見れば分かります。見るだけで分かります。水槽で泳い

でいる、水族館で泳いでいる魚の、動いている、動きそのものを見ればいい。見るだけでいい。それは大人でも子供でも、見て直観的に分かります。生命とは一種の流れです。流れそのものをありのままに把える。流動としての生命をありのまま把えるのは「直観」です。説明（言葉）は要りません。「生命とは何か」という問いに言葉を以て説明しようとすれば、真相はむしろ隠れます。実在の真相を把えることは全然難しいことではありません。禅仏教でもそういわれますし、ベルクソンもそういっている。その意味では、ベルクソンと禅の根本思想は通底しています。

今の、「生命とは何か」に関する話は、学生時代からの私の親友で、京都南禅寺の現管長を務める田中寛洲と学生時代に交わしていた話です。学生時代には彼も哲学をやっていて、彼はカントとハイデッガーを、私はアウグスティヌスやヤスパースをやっていました。あるとき彼は、哲学には限界がある、哲学では究極の問題は解決できないといって、禅のほうに転向しました。この度、その転向後にそういう話を彼と交わした記憶が蘇りました。改めて〈Bergson au Japon〉を読み直して、それが契機になって、禅者田中老師との昔日のその会話を懐かしく想い出すことになりました。禅でいう直観とベルクソンがいっている直観は通じています。九鬼の慧眼かと思います。

ただ、一つ注意すべき点があります。上に、「言葉は真相を隠す」といいましたが、しかし、禅もベルクソンも「言葉」を全面的に拒否するのではないということです。両者とも、日常言語の使用方法を破壊するのです。もちろん、破壊のための破壊ではありません。否定を媒介にして言語以前のありのままの姿に立ち返らせ、言語に原初的な意味を取り戻させるといっていいかもしれません。例えば、ベルクソンの「純粋持続」（durée pure）は「時間ではない時間」といったようなものです。「純粋持続」は「時間」なのだが、しかし「時間」（temps）という言葉を聞くと、われわれはどうしても、例えば、普段馴染んでいる、あるいは馴染みすぎているといったほうがいいかもしれませんが、時計時間のような「数量的な流れ」としての「時間」（temps-quantité）を思い浮かべてしまいます。そのような「時間」を一度否定して、「質的な流れ」をありのままに把えます。これが本当の「時間」（temps-qualité）です。流れそのものです。その意味で、これは「時間ではない時間」です。時間なのですが時間ではない時間なのです。これをベルクソンは「純粋持続」と呼びます。「時間ではない時間」という表現は冗長すぎるというか、事態に密着しきれません。それでベルクソンは、その「時間ではない時間」を「純粋持続」という直截な表現に置き換えるわけです。

すみません、ちょっと時間超過しまして。

○司会　小浜先生、ありがとうございました。ではここで三分間休憩をとらせていただきます。休憩の間、未公開の資料の画像をこちらの机の上に置きますので、関心をお持ちの方は御覧になってください。

（休憩）

○司会　それでは、討議に入っていきたいと思います。

中嶋先生、小浜先生、お話をいただき本当にありがとうございました。まず中嶋先生、資料の実際の作業にあたられた方でないと分からない情報や写真なども交えながら、実に詳しくお話しいただきまして、甲南大学のスタッフとしては、ぜひこんな充実した形でこれから作業できればいいな、という希望を持ちました。それから小浜先生は哲学の議論のほか九鬼周造の人生の様々な側面や関心に触れていただき、実際に今後九鬼の資料を使って哲学研究がどのように深められていくかという部分で可能性の一端も見せていただけるようなお話であったと思います。

それでは皆様、御質問、御意見などお持ちと思いますので、どなたからでも挙手いただいて御発言いただけたらと思います。

○質問者一　筑波大学でフランス哲学の教鞭をとっている津崎良典と申します。非常に興味深く拝聴しました。

フランス哲学に関して言うと、二〇世紀のさまざまな思想家の講義録が、現在、整理され、また、翻訳されつつあります。デリダであるとかドゥルーズであるとか、さらにはベルクソンもそうです。ベルクソンに関しては、実は遺言で、コレージュ・ド・フランスの講義録はすべて出版してはいけないことになっていますが、その遺言を破って、フランス本国で講義録が出版され、かつ、日本語訳が始まっている。

私はデリダの講義録についてとても興味深く思ったんですが、彼は例えば、「ここではあらゆる声色でものまねをしてくり返す」とか、「沈黙の時間を目立たせる」とか、あるいは「即興で註解する」といった、いわば演技指導のようなものを原稿に書き込んでいるんです。そういう意味で、意図的に演劇のように講義をしていた。

そこで中嶋先生にお伺いしたいのは、西田の講義録を研究していると、どこか彼の肉声のようなものが聞こえてくるとか、講義ノートだからこそ窺える彼の人柄のようなものがあるとか、そのようなことはあるのだろうか、ということです。先生の御感想をお聞かせくだされば、と存じます。

もう一つの質問は、研究手法に関することです。私自身はデカルトを研究しております。デカルトに関しても生前出版された四つの著作のほかに、遺稿や書簡があります。彼の書簡は、現存しているもので約七三〇通ありますが、すべて日

本語に訳されています。さらに、今世紀に入ってから、研究者の知らなかった書簡が「発見」された、ということもありました。

二〇世紀のデカルト研究史を振り返ると、デカルトの生前に刊行された著作以外の資料に依拠して彼の思想を研究することは、手法としては問題含みだという主張があります。ですから、マルシャル・ゲルーといった研究者は基本的に、生前に刊行された著作以外の資料には依拠しません。当然、そのような手法には批判もあります。

今回のシンポジウムでは、お二人の先生はむしろ、刊本以外も積極的に活用することによって哲学者の思想に関する理解が深まる、という立場にいらっしゃいます。私自身もそういう立場にいますが、しかし、デカルトを研究していると、さきほどご紹介したような研究手法を念頭に、それでは駄目なんだ、それではテクストの徹底した内在的な理解にならないんだ、という声も聞こえてくるわけです。

そのような批判に研究者としてどう応えていくか、というのはなかなか難しい問題だと思いますが、いずれにせよ、今回のシンポジウムでは、とりわけ九鬼に関して、ベルクソンとの未公開書簡を具体的に取り上げつつ、それに依拠することで、刊本において公開され、したがって私たちに既知の、九鬼その人の思想や生涯に関する理解が深まる、ということが示されたわけです。そこで、もう少しそのような事例を挙げてくださればと思いますし、さらには、テクストを読解し、思想を理解するうえで、さきほどご紹介したテクスト内在主義と外在主義をめぐる対立というか両立というか、そのようなことについて、何かお考えがあれば、それもお聞かせくださればと存じます。

○司会　まず、中嶋先生からお願いします。

○中嶋　後のほうからお答えしたいと思います。研究手法として、西田が刊行していないものを使って研究していくことの問題ということです。私の場合、特に博物館なんかにいましたので、西田の哲学の研究だけではなくて、人物誌的な研究を期待されることが多いし、一般のお客さん向けには、むしろ人物の側面のほうがおもしろかったりする。ただ、危険だなと思っているのは、人物誌的な論点として、よくありがちな話として西田自身の御家族の不幸と関連付けて西田の哲学を理解する、ということがあります。わたしは、これは無関係だとは思わないですが、ある程度、禁欲的にしたほうがいいだろうという気はいたします。

○質問者一　そのあたりのバランスをどうとるかがすごく難しいですよね。

○中嶋　そうですね、そこは難しいところだと思います。

ただ、一方で西田の場合、刊行された論文の中には、ほと

んど出典が出されていない。そして、論理の飛躍が非常に多かったりする。ひょっとしたら当時の学生さんであれば、常識的に分かる文脈なのかもしれませんけれども、今の我々にはとても分からない文脈が多過ぎるのです。それを確定していくために、今のような資料は使えるのかなという理解をしています。

それから、西田の講義録を見て感じたことがないかということですけれども、これは画像をお見せしたほうがいいかもしれませんが、やはり、推敲の跡が見られるのが非常におもしろいというか、気になるところかなと思います。

○質問者一　その推敲の痕跡から何か彼なりの思索のパターンみたいなものが浮かび上がってきたりとか（大胆な仮説ですが）、そのようなことはありますか。

○中嶋　パターンと言えるかどうか分かりませんけれども。

○質問者一　書き方とかノートの使い方にはあるでしょうか。

○中嶋　取りあえず一つ紹介したいのが、タイトルが二重、三重に修正されているところです。倫理講義ノートの第二章のタイトルが「人格と個人性」となっています。この「個人性」のほうなのですけれども、西田は最初に「個人性」と書いて、それを一旦消して「人格性」にしている。けれども最後に、「人格性」を消して「イキル」と書いている。これは「個人性」の削除を取り消して生かすということで、もとも「人格と個人性」に戻したのだと思います。

こういうのを見ていると、西田にとって「個人性」という言葉はしっくり来てない。「人格性」も多分あまりしっくり来てないみたい。その辺りをおもしろいなと思いながら読んでいました。

○質問者一　結局のところ、ノートは肉筆なので、彼なりの筆使いというか、そういった部分に、先ほど先生がおっしゃったような、彼の人物像のようなものが窺い知れるのかな、などと思ったりしてお答えを拝聴しました。西田の場合、講義の音声は残っていないと思いますが（フランス現代思想のフーコーやデリダ、ドゥルーズの場合は講義の録音が残っている）、それだけに講義ノートの肉筆部分というのは、思想研究上の重要な情報源になりうるのかな、などとも考えました。

○中嶋　そういう面でいうと、時々縦書きが入るときがあるのです。それは議論に必要のない言葉なのだけれども、西田の心情として、どうしても書いてしまったという、そんなニュアンスがあるのかなと思ったりします。このニュアンスは、画像を見ないと分からないです。

○質問者一　そうですよね。よく分かりました、ありがとうございます。

○司会　小浜先生からもお答えをお願いします。

○小浜　先に述べたように、九鬼の場合はパリのベルクソンの生の哲学、直観の哲学に共感を持ちました。パリからハイデッガーのいたフライブルク、マールブルクへ転じます。二回目のドイツ滞在でした。「全集」第一〇巻所収の「講義　ハイデッガーの現象学的存在論」の中で、ベルクソンには死がないと書いています。具体的な個人の生には必ず死はあるから、生と死をトータルで問題にしないと、具体的なものは捕まえられません。ハイデッガー流にいえば、具体的な個人の生、存在は「死に即した生」（Leben zum Tode）、「無に即した存在」（Sein zum Nichts）です。

林芙美子との交流のきっかけ、その後の交流の継続の要因もそこにあったのだろうと思います。九鬼と芙美子は、「死に即した生」、「無に即した存在」ということについてとても強い共感を持っていたと思います。未公開書簡からもそのようなことを垣間見ることができるように思います。ある種の文学と哲学とは問題を共有する部分があるのかもしれません。今回は触れる機会がありませんでしたが、「偶然文学論」の中河与一との往復書簡もその方面の研究にとって貴重なものになるかもしれません。

逆に少しお聞きしたいのは、未公開の書簡等を、哲学の理解に、例えばデカルトの理解に、利用すべきではないということを言う人がいるということでしたが……。

○質問者一　そうです。

○小浜　それはなぜなのでしょうか、逆にお尋ねしたい。現在、未公開書簡の発刊に向けた翻刻・注解の作業もほぼ終わりに近づいているのですが、その作業に携わってきた私にはこれまでそういう発想が全然なかったので、ご教示願いたい。

○質問者一　つまり、同時代の人や後代の人に共有されていない資料を使った解釈というのは、結局、恣意性を免れないというか……。

○小浜　恣意性が入るということですか。

○質問者一　公開された資料というのは、著者の手元を離れますから、それはある意味、客観的な存在としてある。誰もが等権利的にアプローチすることができる。しかし遺稿や書簡について言えば、とりわけ今回ご紹介くださった資料というのはまだ門外不出なわけで、大仰に申し上げれば、資料としては結局のところ共有できないわけです。そうすると、等権利的にアプローチできない。これを使った思想の解釈は、どこかで恣意的な操作が入り込んでしまう可能性はないのでしょうか。

例えば、先ほどご紹介された、九鬼の一身上の問題（遺産だとか離婚だとか）に関する書簡の扱いはなるほど難しい。私も直感的にそう思います。デカルトの場合も実は遺産に関する書簡があります。ただ、死後、四〇〇年近くたっていま

すから、私たちは何の躊躇もなく全部訳してしまっているわけです。しかし、デカルトからすれば、それは多くの人に読まれることを想定したものだったのか。たしかに一七世紀のヨーロッパで書かれた書簡のうち、例えば科学論文に相当するような書簡は、送られてきた側が勝手に複写をして、自分が所属する学問共同体のなかで回覧することが当たり前になされていました。しかし、遺産に関するようなプライベートな書簡までそうだったかと言えば、多分そうではなかっただろう。となると、多くの人が共有できないものにどこまで依拠して、テクストや思想を解釈していくのか、いけるのか、というところに、先ほど申し上げたような恣意性の問題が浮かび上がってくるのではないか、ということです。

だとすれば、最初から潔くそれは全部排除して、生前に刊行された資料だけを使って厳密に解釈すべきではないかという、二〇世紀のフランス思想の一潮流であった構造主義的な研究手法が訴求力をもつようになってくる。その背景にある批判というのは、書簡などを使う解釈法は、哲学者や思想家は当時どのような心理状態にあり、それが思索にどのような影響を与えたのか、ということに関心を寄せる限りで心理主義的である、というものです。

○小浜　例えば、デカルトなどの場合は、そういうことが言えるかもしれませんが。例えばハイデッガーなどの場合は、未公開書簡の方も重要な場合もありそうな気もしますが。（哲学者によるのではないかと思いますし、ひいては、「哲学とは何か」という問題にも関わってくるのかもしれません。「書簡」の持つ意味も哲学者や時代によって変わってくるのかもしれません。）

○質問者一　その意味で、私は、先ほど先生が御紹介くださったハイデッガーの推薦書などを拝見してとても驚きました。このようなものがあったんだ、と。ですから、本当にいろいろ蒙を啓かれました。

○小浜　すみません、何か逆に聞いてしまって。

○司会　いえいえ。多分、今日はそこが一番本質的な問題といいますか、我々にとって切実な部分なのです。哲学者の死後にどれだけ時間が経っているかということとも関わってくると思いますし、哲学者の性質によっても違ってくるところがあると思います。九鬼の場合、どうしても花柳界での遊興とか、その辺の人生の部分が一緒に語られる思想家ですので、公開することでバイアスがかかってくるところもあって、どう判断するか難しいところです。その点はまた西田の場合とも違ってくるのかなとも思われます。その部分を御議論いただいて、非常に参考になりました。

○質問者二　広島大学名誉教授（現在、安田女子大学教授）の

山内廣隆と申します。

中嶋さんには、時間がないから後でお話しするとして、私の中学時代からの先輩である小浜さんに、二つ三つお話ししたいと思います。

カントの善意志についてですけれども、これを我々に理解してもらおうと思ってワールドカップの問題を出されたんですが、ちょっとまずいのではないかと思いました。つまり掃除することについては、アカデミックに研究する人がいて、そういう人から見れば、ヨーロッパ人にとっては、掃除はずっと歴史的に奴隷の仕事ですよね。それに対して、日本人にとっては精神修養の仕事です。そういう違いから掃除を説いて、教育学に生かした人がおられて、それをすぐ善意志と結びつけるのはどうかな、と思いました。それが一つ。

それから、一八八五年から英米系の哲学に対して、ドイツ系の哲学が入ってきたと書かれてましたけれども、もうちょっとドイツは後じゃないかと。一八九二～九三年。これもイギリスを通じてドイツの哲学が入ったんですよね。トーマス・ヒル・グリーンを通してカント、ヘーゲルが入ってくるので、もうちょっと後じゃないかなと思いました。

一番、小浜先輩に質問したいのが「即」です。田邊元なんか、「無即有」とか言ったりしますが、この「即」です。田邊なんかあるところで「即」をドイツ語の「als」と読んでもいいと言ったりしてますけれども、とても「als」だけでは読めないわけで、「無即有」と「即」を使うのがマイナスのところであって、多分ベルクソンが（小浜さんはベルクソンには生しかないと言われましたけれども）そこにとどまった由縁かもしれない非常に深い問題で、あなたは「即」をどう考えますかということを一番質問したいと思って手を挙げました。即、お願いします。中嶋さんには、また後で飲みながらでも。

○小浜　まず、善意志を、ワールドカップでの掃除に結びつけるのはまずいのではないかということですね。その理由は、「掃除」はヨーロッパでは奴隷の仕事であって、日本ではそれが精神修養の行いであったからとかいうことのようですが、そういうことを私は全然考えもしませんでした。というか、そのように考えないとやはりいけない、まずいということでしょうか。（私には全然理解できない、というか、議論の共通の土俵に立てないというしかありません。）

○質問者二　いや、いかんというよりは、そういうふうに体系化して、日本の教育に生かされていますよと、掃除することは。あちこちで、宗教団体でもそういうのを使ったりしてますよね。

私は西田、山科にある天香さんのところで修業したことが昔あったんですけれども、高校の教員をやってるときに生徒

会の生徒を連れて三日ぐらい泊まって、便所掃除もありましたけど、ありとあらゆるところで掃除が教育のツールとして使われて、その心は掃除をする、特にトイレを掃除するのは精神修養で。ある程度、日本では共通認識がある。

○小浜　いや、だから、私の言いたいのは、（それは全然「精神修養」などといったようなものではないと思うし、そもそもそういう発想自体が私にはできません。たとえそうであったとしても）精神修養ではなぜいけないのか、ということなのですが。

○質問者二　いや、その精神修養がカントの善意志ではない。カントの善意志ではなくて、もっと違う日本的な徳概念というか、そういうものが根本にあると思いますよ。

○小浜　「掃除」という例がまずいというご指摘で、それはそうなのかもしれませんし、考え方は色々あっていいと思います。ただ、私が言いたいことを突き詰めていけば、要するにカントが言いたいのは、先に述べたように、その「善意志によって（von dem guten Willen）」行い始め、行為自体が「善意志にのっとって（gemäß dem guten Willen）」行われ、そして最終的には他者のためではなくて自分のためでもなくて「善意志のために（für den guten Willen）」行う。カントが言いたいのは、そういうことだと思います。

○質問者二　そうですね。

○小浜　われわれは、何か自分の行為の結果ないし成果に対する見返りを求める、そういう意味で他者から何かを求めたがる。

○質問者二　ただ、この質問には深い意味があって、西田の「純粋経験」と善意志はつながるんですよ。他者のためにやるんじゃないんですよ、自分のためにやるんですよ。西田が説く「必然的自由」という人間の自由は徹底的に自分のためにやるんですよ。この場合の人間は普遍化されているという構造になっているから、問題がないように見えますが。でも、他者のためにというのが欠けると、大変なことになるんじゃないですかね。

○小浜　いや、私は、究極的には、善意志にもとづく行為というのは、自分のためにもやるものではないと解しています。

○質問者二　いや、多分、ここで今、哲学の問題で突っ込まなきゃいけないのは、「即」のこととつながってきますから、つなげて話してもらったら。

○小浜　「即」というのは、前述の九鬼の論考〈Bergson au Japon〉ではフランス語の「est」、ドイツ語の「ist」です。

○質問者二　「als」。

○小浜　「als」ですか。

○質問者二　「として（als）」。

○小浜　「として」ということですが、私もちょっと聞き逃し

ていましたが、どんな質問だったでしょうか。「として」というのは。

○質問者二　だから、「即」という言葉を使うときには、ドイツ語の「als」という意味で使っているという言い方だけでは理解できないところが「即」にはいっぱい出てきます。それで、「即」が出てくると即、これは逃げじゃないかなと思って私は読んでるんですけど、そういう考えはないですか。

○小浜　「即」、「として」？

○質問者二　いや、ある部分、即は「als」としても読めるよと田邊は言ってるけれども。

○小浜　例えば、有と無で言うと、どういう感じになるでしょうか。（「有としての無」（Nichts *als* Sein）、「無としての有」（Sein *als* Nichts）ということになりそうですが。）

○質問者二　だから、「有即無」には「als」は使えないと思います。

○小浜　そうかもしれませんが。

○司会　質問の御趣旨は、「als」は「即」と読めないのではないかということでしょうか。

○質問者二　いやいや、例えば、即でよく日本の哲学はつなぐんですよ。「そんなにつながるの？」というのが、多くの人が思う疑問であって、これにしっかり答えられない日本の哲学研究はどうかなと思うんです。山内得立なんかは出会うという言葉を使ってますね、「als」を。でも、「即」は出会うだけであって決して総合ではないのに、即を総合という意味で使っているところがあります。

○小浜　「即」の解釈については今この場ですぐどうのこうのということは難しい。（また別の機会に、別のテーマの席で、としか……）

○質問者二　そこが、日本の哲学のポイント。

○小浜　先ほどの九鬼の表現だと、〈Néant *est* Être〉（〈Nichts *ist* Sein〉、〈Nothing *is* Be〉）を「無即有」と訳しています。直訳すると「無は有（存在）である」という意味です。「無」と「有」が〈être〉の三人称単数形（〈est〉）の繋辞で結ばれています。主語と述語の同一性を意味するこの繋辞を九鬼は「即」と訳しているわけです。その「即」が問題だというのでしょうが、いまこの場ではここまでしか言えません。

○質問者二　「存在は無である」といったときに。

○小浜　繰り返しますが、〈Néant *est* Être〉を九鬼は「無即有」と訳しています。もちろんベルクソンも、九鬼が「無即有」と訳す〈Néant *est* Être〉という命題を読んでいます。多分、ベルクソンも彼なりにそれを理解していたと思います。参考までに、先に芙美子との関係で述べたハイデッガーの〈Sein *zum* Nichts〉、〈Leben *zum* Tode〉は、それぞれ「無への存在」、「死への生」ではなく、「無に即した存在」、「死に即し

た生」です。ここでのドイツ語〈zu〉とはそういうニュアンスです。〈to〉ではありません。

○質問者二　いや、私が聞きたいのは、小浜先生が「即」をどう理解してるかだったんだけど。

○司会　かなり深い議論になっておりますけれども、一旦そのあたりで中断していただいて、また、いずれ公開された際に議論を深めていただけたらと思います。

○司会　時間をオーバーしてしまいまして、司会者としては大変恐縮です。今日は遠方からもお越しいただいている方々があると伺っていますので「せっかく神戸まで来たからには、一言これは言っておきたい」という方があれば、どうぞ。

○質問者三　東京の立正大学から来ました。八杖春樹と申します。今、学部の三年で、卒業論文で九鬼を扱おうと考えています。時間もありませんので、一点だけお願いします。

九鬼のカント、ベルクソン評の所で問題となっていた「善意志」の受容という点について一つ疑問があって、僕はこれまでの質問者さんとは違い、かなり稚拙で素朴な疑問になってしまうんですけれども。「善意志」が日本で受容される上で、武士道の「絶対的精神」の信仰が素地にあったという九鬼の主張。これはとても納得がいきます。ただ、そこで疑問に思うのは、九鬼自身が「善意志」をどう受容していたのか、もっと広く言えば、九鬼自身がカント倫理学をどのように考えていたのかということ。

九鬼を読んでいて、あまり一貫してないように感じる点があって、たとえば、ポンティニー講演、いわゆる九鬼の時間論なかで、すごく「善意志」を尊重しているなと見えるところがある一方で、『偶然性の問題』の最後のほうでは、おそらくカント倫理学を念頭に置いて、それについて批判している。カントの考えはすごく抽象的で、具現性に欠けているみたいなことを言っている。九鬼自身、カントをどう受容していたのかちょっと分からない。そこに、「善意志」が日本で受容される上で重要になっていた武士道の「絶対的精神」の信仰のようなものが、九鬼自身にも関わってきていたのか。それとも、あまり関係なかったのか。このあたりについて、お伺いできれば。

○小浜　九鬼がその哲学の中に、カントの「善意志」の思想を取り入れて生かしたかどうかについてですが、生かしたいという思いがあったのは確かだと思います。ご存知のように、論考〈Bergson au Japon〉や「形而上学的時間」などでは、特に武士道の「絶対精神」と通じるものとしてそれを大いに称揚しています。とりわけ「形而上学的時間」では、ニーチェよりははるかに論理的に、K・レーヴィットやハイデッガーに先立って、「同一のものの永遠回帰」という思想によって

「ニヒリズム」という時代の病を超克するための方途を提示しようとしたわけですが、そのいわば「超・力」（Übermacht）を与えてくれるものが、武士道の「絶対精神」であり、そしてそれに通じるカントの「善意志」であると見ていると思います。その意味では九鬼はカントの「善意志」を議論の中で生かそうとしていると思います。

ただしかし、先に引用した九鬼の詩篇の中に天野貞祐について歌った一篇がありました。それによれば、確かに天野はまさにカントの「善意志」あるいは「定言命法」（kategorischer Imperativ）を具現化したような人格で、その意味で全面的に尊敬に値し、憧憬すべき友なのだが、しかし他方で、自分はとてもカント倫理学の具現者天野のようにはなれない、もう少し人間の迷いや弱さを受け入れてくれるようなところがあってもいいのではないかといったようなニュアンスがその詩篇には読み取れるように思います。そしてこれは直接には天野について歌ったものですが、実はカント倫理学に対する九鬼の思いでもあったに違いありません。九鬼がカント倫理学とこの世に迷う煩悩のわが身との懸隔ないし乖離を感じていたのも事実ではないでしょうか。

○質問者三　九鬼はその時間論のなかで、シシュフォスの神話や地下鉄の話を取り上げて、シシュフォスは幾ら岩を落とされてもまた何度でも岩を持ち上げるとか、地下鉄が幾ら地震で破壊されても我々はまたつくり直す、地下鉄があるということじゃなくて、作ろうという意志のほうに意味があるんだといったようなことを言っていたと記憶しています。こうした点から、九鬼はカントの「善意志」を極めて好意的に捉え、自身の哲学にそのままの形で導入しているのだと僕は思っていたのですけれども、そうとも言い切れないところがあると。九鬼はそのままに受け止められたわけではない。カントの「善意志」とちょっとずれている所もあるということになりますでしょうか。

○小浜　ご指摘のように、九鬼は、論考「形而上学的時間」の結論近くで有名な「シシュフォスの神話」を取り上げています。その罪を許されるために、岩を山頂へと運ぶよう命じられたシシュフォスが、あと一歩のところでいつも岩を落としてしまう。「またしても、またしても」（πάλιν καὶ πάλιν）、同じことの無限の繰り返し、といったような内容の、九鬼の後にはカミュも取り上げたギリシア神話です。それは、日々同じことを繰り返している私たちの日常生活（「同一のものの永遠回帰」）を暗示しています。それは退屈な生か、無意味でニヒルな生かと九鬼は自問します。それに対して彼は、いや、「同一のものの永遠回帰」としてのこの生は、これを日々生き抜くことによって充実した楽しい生、有意味で豊穣な生になしうるのだと自答します。その力を与えてくれるものが

「武士道の精神」に通じる「善意志」と考えられていると思います。ただ、先にも述べたように、他方で九鬼は、自身の生の基準としては「善意志」に対して少し「遠さ」を感じていたように思います。

○質問者三　ありがとうございます。大変勉強になりました。

○小浜　なんとなくはっきりしない回答で申し訳ありません。

○司会　それでは大分時間も過ぎておりますので、本日のシンポジウムは以上で終了とさせていただきます。

本日シンポジストを務めてくださいました中嶋先生、小浜先生、本当にありがとうございました。そして会場にお越しくださいました皆様も本当にありがとうございました。